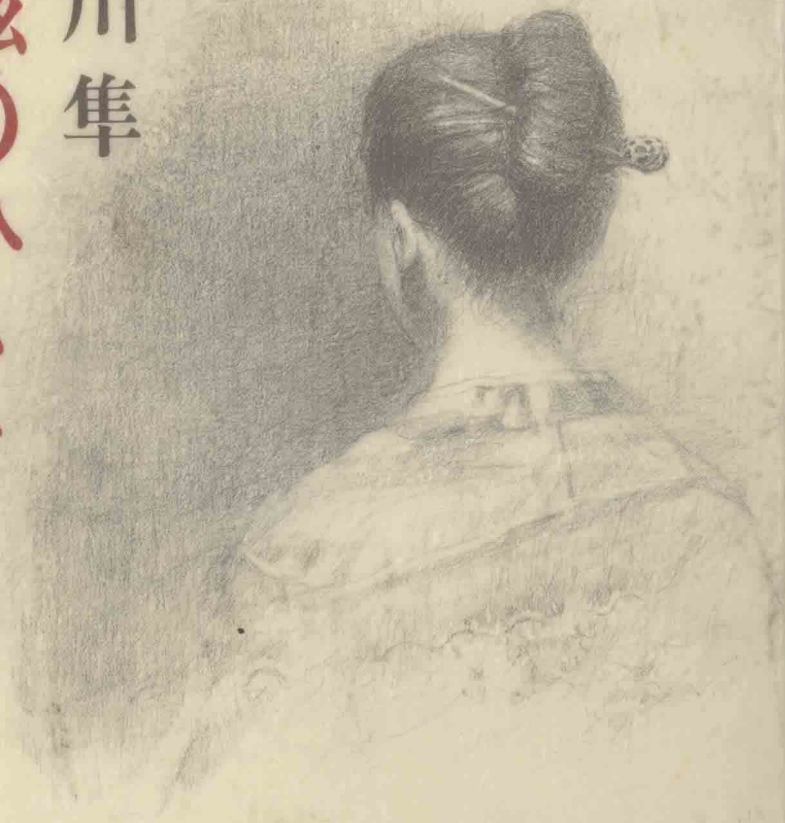


青磁のひと
赤瀬川隼



新潮社

赤瀬川 隼
青磁のひと



新潮社

せいじ
青磁のひと



昭和六十一年三月五日 印刷
昭和六十一年三月十日 発行

著者 赤瀬川隼あか せ かわ しゅん

装幀者 松沢茂雄

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号一六二 東京都新宿区矢来町七一
電話 業務〇三(六六)五一一一 振替東京四一八〇八
編集〇三(六六)五四一一

印刷所 二光印刷株式会社

製本所 大口製本株式会社

定価一〇〇〇円

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えます。

© Shun Akasegawa, 1986 Printed in Japan

ISBN4-10-359402-0 C0093

青磁のひと

赤坂見附で地下鉄を降り、内田教授からいわれたとおり弁慶橋口に出て正面を見上げると、なるほど交差点を隔てた先に、何本かの縦ひだを刻んだ超高層ビルが、銀白色に輝いて青空にそそり立っていた。

「いいか、それがホテルの新館だ。弁慶橋を渡るとすぐ右に、新館に通じる坂道がある。そこを通って一旦新館の正面に出てだな、それを巻くように進むと、右に見えるのが別館で、左奥が旧館だ。ここまではつかめたか」

「はい、つかめました」

おおといの晩の電話のやりとりである。

初めはその電話には、教授ではなく春子夫人が出ていたのだ。

「佐甲^{さぎょう}さん、赤坂のあたりはよく御存じでしょ」

「いいえ、全然と言っていいくらい知りません。まず行くことがないものですから」

佐甲達秋の家は井の頭線の久我山にあり、勤め先は品川である。仲間と飲んだり、ちよつと用をたしたりするのは、たいてい品川か渋谷で、赤坂界限にはまず縁がない。

それでは、というので道順を夫人が達秋に伝え出したのだが、それを脇で聞いていた教授が我慢できなくなつたらしい。

「佐甲さん、あたしの言い方じゃ、だめですつて。代わるわね」

そうして内田教授が電話に出て、道順を克明に伝え始めたのだった。

「旧館はな、二階建てで屋根のついた……あれ、屋根の部分を三階というのかな、それとも屋根裏というのかな、とにかく屋根からも窓がいくつか出てる、何ていうかな、ほら、古い西洋館だよ」

「ははあ」

「その玄関を入つて一階の右手にな、ナポレオンというバーがあつて、昼は喫茶室になつてゐる。とりあえずまずそこに集まる。午後一時だぞ。いいな」

「はい」

「ここまでつかめたか」

「はい、つかめました」

達秋は苦笑しながら答えた。「ここまでつかめたか」というのは、達秋が大学で教わつた内田教授の、講義の口ぐせだった。

教授は、電話での自分の教え方に満足した様子で言った。

「まったく、春子に任せといたら、きみは確実にお見合いに遅れるよ」

佐甲達秋は、その電話のやりとりを思い出しながら、赤坂見附の交差点を渡り、弁慶橋を渡つて右に折れ、石畳の細い並木道を登って行つた。初夏の陽射しに少し汗ばんでくる。

——とうとう、お見合いか。するのはいいけど絶対に一人で行くと言つたら、おやじもおふくろも不満そうな顔をしてたな。仲人の内田教授夫妻も困つていた。「親が出席しないのが最近のやり方だとは聞いているが、私は昔のオーソドックスな形がいいと思う。何でも最近は仲人すら紹介がすむと二人だけにして姿を消すのが気の利いたやり方だそうだが、私はそうは思わん。あくまで両方とも御両親、それが不可能ならせめてどちらかでも出ていただきたい。先方もそれをお望みだ。おまけにきみは一人っ子で初めての見合いじゃないか。御両親が気が進まないのならともかく、お二人とも私にはぜひ出席したいとおっしゃつた。親孝行だと思つてお連れしなさい。場所も私がそれなりにオーソドックスなところを選んだのだ」と「オーソドックス」を連発して説得にかかったが、結局はおれの意地のほうが勝つた。どれ、教授の選んだオーソドックスな会場とはどんなところだろう。

坂道を抜けると、銀白色のビルの直下に出た。達秋は思わずビルのトップを見上げた。ガラスの壁面が陽光を反射して達秋の眼をチクチクと刺す。達秋はあわてて眼を伏せた。

内田教授からいわれたとおり、その赤坂プリンスホテルの新館を巻いて裏手に廻ると、なるほど、中央に小さな尖塔が立ち、いくつかの出窓のある屋根をいただいた、二階建ての古い建物が現われた。ホテルというよりも、一時代前の瀟洒な邸宅である。

達秋は、同じホテルの敷地の中の、この景観の急な移り変わりに驚いていた。今まで視界が、

まるでジャンボ旅客機の合金の胴体を何機分か延ばして作ったような、銀白に照り映える超高層ビルの壁面に占められていたのが、急にこの古く寡黙なたずまいの館に変わったために、まだ自分が生まれていなかった時代の土を踏み始めたのではないかという気にさえた。

——何か、ひっそりと深く沈んで生き残っているような空間。あの超高層の新館は、まるでこの古い館を外界とさえぎるための屏風びょうぶみたいだな。そういうえば、新館の壁面の縦ひだは、屏風のひだだ。金屏風ならぬ銀屏風。

まだ少しは時間があったので、達秋は旧館の建物から少し遠ざかって前庭の隅に立ち、建物全体の姿をしばらく眺めていた。

——いい感じだな。初めからホテルとして建てたのだろうか。それとも、だれかの邸宅をホテルが買い取ってそのまま使っているのだろうか。だれかの邸宅だったとすると、これはずいぶん宏壮なお屋敷だな。そうだ、二、三年前に見た古いフランス映画に、こんなマンションが出てきたな。パリ郊外のブルジョアのマンションで、裏は広い庭がひろがっていた。その館のブルジョア夫人のジャンヌ・モローが、月夜にその庭で、偶然知り合った若い男と逢引きする。月光がさんさんと降り注いでいたっけ。ええと、そうそう、ルイ・マル監督の『恋人たち』だった。モノクロームの美しい画面だったな……さてと、こちらはその屋敷で、逢引きではなくお見合いだ。達秋が館の車寄せに向かってゆっくり歩き出すと、右手の門から、男一人女二人の三人連れが現われ、同じく車寄せに向かってまっすぐに歩いてゆく。達秋はやり過してうしろから行くことにした。中年の夫婦と若い娘のようである。若い女が三人の中で一番背が高く、真っ白なワンピースの後姿がすなりとしていて、脚の形と歩き方が美しい。

達秋は、その女が今日のお見合いの相手にちがいないと直感した。彼女たち三人は、庭の隅の木蔭から歩き出した達秋に気づかぬふうだった。達秋は三人に十メートルほどの間を置いて車寄せに向かった。

女がちよつと横顔を見せた。それからうしろを振り返るそぶりを見せたようだったので、達秋は思わず足をゆるめた。しかし女はそのまま顔を前に戻して歩いてゆく。

今度は達秋の足が速くなり、車寄せに着いたときには三人のすぐうしろに近づいていた。ドアをあけて年輩の二人を先に中に入れた女が、すぐあとに達秋がいるのに気づいて、そのままドアを支えた。そして小声を發した。

「あら」

達秋はドアを支えながら答えた。

「どうも。佐甲です」

そして小手川理和こてがわりわに先に入るように促した。

「お母さん、佐甲さんと一緒になっちゃった」

その言い方がざつくばらんだだったので、達秋も気が楽になった。

「おやまあ」

母親が驚いたように振り返って達秋を見つめ、それから笑顔を見せて頭を下げた。父親はすでに角を曲って、指定された喫茶室のほうに向かっている。母親は達秋に、

「気がつきませんでした。どちらから？」

「はあ、弁慶橋から新館のほうを通って来ました」

「そうですか。私たちは麴町のほうから参りました。それで……」

それで途中では逢わなかったという意味だろうが、達秋は、ずとうしろからつけて来たと誤解されずにすんだ氣配に、ほっとした。そしてそれっきり黙って、二人のうしろから喫茶室に向かった。

「やあ、私たちもつい三分まえに来たところです。三分以内にみんながいつべんに揃うとは、これは何やら氣分が合ってますな」

内田正剛教授の快活な声がした。春子夫人もそれに同調するようににこやかに笑った。

「これなら、いきなり二階のダイニング・ルームに集まってもよかったかな。まあ、せっかくだから、ここで一休みしてから移るとしますか」

六人は改めて喫茶室の一角に腰をおろした。確かに、ここで簡単に紹介をすませてから昼食に入ったほうが氣分がほぐれていいだろう。

達秋は、夜分からバーになるという「ナポレオン」をゆっくりと見廻した。なるほど、昔風のがっしりした造りだ。長方形の太い柱と、それほど高くない天井が白く塗られ、照度を押さえた灯りに柔らかく浮かび上がっている。窓際に、黒いカバーのかかったハープが立てかけられている。隅のほうに、若い男女の客が一組いて静かに話している。

——あのハープは、夜にはカパーをとって、長いドレスを着た女が弾くのだろうか。一度、バーのタイムに来てみようかな。しかし高いだろうな。

「何せ、お断りしましたように、佐甲くんは一人で来ると言い張って御両親を大変困らせまして、私たちも説得したんですが、この男、案外頑固なところがありましてね、悪しからず」

「いえいえ、こちらは一向構いません。面白いお人ですな。何にせよ男は方針を持たなきゃ」

達秋は小手川理和の父のことばに内心で苦笑した。そしてやっぱりことばに出した。

「方針というほどのものでもありません」

理和がかすかに笑ったようだった。

達秋が父母と内田教授夫妻に話した気持はこうだった。「教授夫妻のせっかくの紹介だから、小手川理和さんには会う。相手が両親と来ることには一向こだわらないが、いくら仲人のオーソドックスなやり方に従うといつても、三十二にもなる男が両親同伴なんて恥ずかしい限りだ。女のほうは最初から一人というわけにもいくまいが、男は仲人以外は当事者だけでいい。それにぼくは、一人でみなさんと話したい」

話を持ってきたのが内田教授夫妻でなければ断っていただろう。それで、せめて注文の一つぐらいは聞いてくれというわけだった。

内田教授は小手川理和の両親に笑いながら言った。

「それでぼくは佐甲くんに言ったんですよ。それじゃ、きみは当日、お家にいらつしやる御両親にテレビ中継してさしあげなさい。天下の巴電器とまでんの社員だ。それぐらいの仕掛けはできるだろうって」

小手川理和も両親も笑い出した。達秋も釣られて苦笑いした。笑いながら達秋は、理和をさりげなく眺め、こう思っていた。

——うむ、この人は、テレビのアップにたえる容貌をしている。二十八にしては若い。

二階の小部屋の雰囲気も、フランス料理も、達秋にとっては申し分なかった。いや、本当は達秋はこうした改まった場所やフランス料理は苦手で避けたいところなのだが、内田教授の設定したお見合いの場なら仕方がない。その限りにおいてはなかなかいいところだと思ったのだ。室内のインテリアも調度品も、外から射し込む光線のぐあいも、何となく落ち着いて感じられる。上品である。

一階と二階を歩いたとき、長い廊下の左右に沢山の小部屋の木の扉が見えた。しかしそれがどうもホテルの設計ではないように達秋には思えた。

——やっぱりだれかの邸宅だったんだらう。フランスやイタリアの映画にも、貴族の屋敷の内部でこういう造りがいくつもあった。それにしても、外から見た感じよりも広いな。

そんなことを思いながら達秋がナイフとフォークを動かしていると、理和の父親が内田教授に話しかけた。

「先生、ここは確か、以前はどこかの宮様の持物でしたね」

「ええ、李王家の住まいだったと聞いてます。まえに来たときにホテルの人に聞いたら、昭和五年に建ったものだそうです。ちなみに、ちょうど私めが生まれた年です」

「ほう、ほう。すると、建ってから五十四年、あ、いや 先生のお年もでしたな」

「そういうわけです。失礼ですが小手川さんは？」

「その言い方でいけば、ここが建った年には私は三歳でした」

「はあ、それにしてお若いですよ」

「何の、何の」

教授はそれから、質問を達秋に向けた。

「きみは、李王家というと、聞いたか読んだりしたことはあるかい」

「いいえ、まったく知りません」

「理和さんはどうですか」

「存じません」

理和はそう答えて、しばらく間^まを置いて言った。

「昔は、何々の宮とか何々家とか、貴族というんですか華族というんですか、沢山あったそうですね。そういう家だったんですか」

「そうです。日本では貴族ではなく華族といいましたね。ただし宮家と華族はちがって、宮家は天皇の男系の親戚、そして李王家はその宮家だったんです」

「そうすると、その李とか李王とかいう男の方が、天皇の親戚だったわけですね」

「ところが、李王家だけは例外でした。血縁はないんです。どういふことかというところ、朝鮮の李王朝の皇太子がね、明治時代に日本に連れてこられて、日本の宮家の仲間入りをさせられたんですよ」

「はあ、それで、李とは日本名にしては珍しいと思いました」

達秋は、つまらぬ話題になったものだった。そんな昔の話など、何の興味も湧かない。それに、われわれとは階級のちがった人たちの過去のことでないか。小手川理和も、仕方なしに内田教授の相手になっているのだろう。

と、今度理和の母親が内田教授に向かって言った。

「確か、その李王さんのところには、梨本宮のお姫様がお嫁にいらしたんでしたね」

「そうです。梨本宮方子女王^{まさこ}という方です」

そうか、やっぱりそういう階級の人の邸宅だったのか。達秋はもう一度、小部屋の全体を見廻し、さつきから観察していたこの館の内外のたたずまいを思い返してみた。そして、この館に抱いていた好感と裏腹に、かすかに反感のようなものも覚えた。

父がよく、戦争が終わるまでの時代の特権階級の話をも、いまいまいげにしていたのを思い出したせいもあるう。

「当時のこの土地が二万坪だったそうですから、今の時価でいくらぐらいでしょうか」

「いやあ、見当もつきません、われわれには」

つまらぬ話が続く、ますますつまらなくなっていく、と達秋は思った。その気配を察したか、内田教授が笑いながら言う。

「そうだ、今日は若い二人に、いろいろざつくばらんに話してもらうんだった。場所が場所だもんで、つい昔の話になっちゃった」

「それにしても、年輩の方にとってはついそういうお話をなさりたくなるような場所ですね」
達秋は苦笑いしながら教授に言った。

「おや、ちよいと皮肉に聞こえるね」

「いいえ、そんなつもりはありません。ばくもこの雰囲気はさつきから気に入ってるんです。ただ、家の由来とかについてはあまり興味が湧かないもんですから」

「戦後生まれの若い人たちにとってはそうだろうな」

「あたしも、ここはすっかり気に入りました」

と理和が言った。とっさに達秋は心の中でつぶやいた。

——ぼくは、あなたを気に入りはじめている。

しかし、心のもう一隅でこういう声もした。

——だが、たかが一回の見合いごときで、あなたに屈したりはしないぞ。というより、もしこういう会い方以外で、たとえばどこかで偶然あなたと出逢っていたとしたら、ぼくはたちまちあなたに恋していたかも知れない。しかし、事実はそうではなかったし、ぼくとあなたはこういう会い方をしてしまった。そしてそれ以外にはめぐり逢うことはまずなかっただろう。だから内田夫妻の用意したこういう会い方を享受してもいいのだが、それでもまだぼくは、お見合いということにこだわる。こういう会い方を実現してしまった内田夫妻を恨んでみてもいいほどだ。なぜなら彼らは、二人が偶然出逢うという万が一の機会を永久に摘み取ってしまったのだから。

達秋は、そういう心の動きを理和に悟られまいとして、何でもいから彼女に口をきこうと焦った。そしてまったく平凡な質問をしてしまった。

「理和さんは、白い色が好きなんですか」

「は？ ええ」

「よく似合いますよ」

馬鹿もん！ 達秋は自分がいやになった。

「ありがとうございます」

ところがよくしたもので、こんな平凡なやりとりから、みんなの気分が何となくなごみ、達秋

と理和を中心に、くったくのない会話が流れ始めたのだった。それにつれて、内田教授と理和の父親は、ビールをよく飲んだ。

理和がどの程度化粧を施しているのかは、達秋にはわからない。最近ではほとんど化粧をしていないように見える化粧品も種々できていて、値段は張るが、お金持の女子大生も使っているという話を、達秋は会社の同僚から聞いたことがある。小手川理和の顔肌が、二十八歳にしては衰えを感じられず、化粧も薄そうなのにつやつやして見えるのは、そういう化粧品のせいなのだろうか。

普通に行っているときは静かな面持ちで思慮深げであり、笑うと一瞬にその雰囲気が消し飛んでくったくがなくなる。惜しげなく見せる歯並びが美しく気持がいい。全体として、強いて女らしさを粧よそおわないところが達秋にはころよく、気が休まる感じである。

しかし、これでよく今まで縁談がなかったものだとも達秋は思う。内田教授からは、彼女は一年前までは日本やアメリカで、幼児教育の研究と現場の活動に没頭していて結婚を考えるとこころではなかったらしいが、三十に近づくにつれてやっと自分の子供がほしくなったのだろう、と聞かされている。

しかし、内田教授や両親の知らない恋の遍歴は当然あるだろう。あつてほしい、と達秋は思った。

彼女への関心が増していく中で、達秋はさっきのことばを繰り返し心中で発していた。

—— たかが一回の見合いごときで、あなたの魅力に屈したりはしないぞ。

そして、内田教授が頑固者と評した性向の部類に入るであろう、この自分のこざわりと、小手